（別紙２）

審査結果の要旨

氏名　村上　史朗

本論文は、自尊心を意識に上らない側面(潜在的自尊心)と意識される側面(顕在的自尊心)とに分け、それらの関係を実証的に解明しようとしたものである。自尊心の研究においては、高いことが望ましいとされてきたが、近年、比較文化的研究の結果から、自尊心を高めようとする動機が日本などの東アジアでは存在しない、とする研究者が現れた。しかし、こうした主張のもととなっている研究結果は、顕在的自尊心に関するものであり、研究参加者が反応をコントロールできるものである。そこで、他者からよい印象を得たいという欲求などによって表明する自尊心が影響を受けている可能性がある。そのため、本論文で報告されているように、被験者が意図的に反応をコントロールできない潜在的自尊心についての研究が重要となってきた。

本研究では、潜在的自尊心の測定法のうち、もっとも信頼性の高い潜在的連合テスト（Greenwald, McGhee, & Schwartz, 1998）を用いている。これは肯定的または否定的な意味を持つ属性（例えば、快・不快）と、自己の連合の強さを、カテゴリ判断課題における回答速度（反応時間）によって測定する手法であり、実験参加者が意図的に結果をコントロールするのが非常に難しいことが確認されている。まず、研究 1 から研究 4 では、安定して日本人の潜在的自尊心が高水準であることを示した。次に、研究５では、日本人に一般的である謙遜とその逆である自己主張という二つの価値観と自尊心との関連を調べている。その結果、顕在的自尊心が、顕在的指標・潜在的指標ともに自己呈示的価値観と密接に関連していることを示すことに成功した。さらに、研究 6 では謙遜が重要な文脈では顕在的自尊心と潜在的自尊心が負相関し、自己主張が重要な文脈では両者は正相関するというように、ともに活性化したと想定される知識と一貫した対応関係が見られた。また、研究７では、存在脅威管理理論に基づく死の顕現性の操作を行うと、予想どおり、死の顕現性が高い条件では顕在的自尊心と潜在的自尊心の間に負相関が見られた。さらに、研究８で、潜在的自尊心と潜在的個人主義―集団主義傾向が個人内で一貫するかを検討し、支持する価値観によらず、その価値観と自己を結びつけて認知している場合に潜在的自尊心が高くなるというように、潜在的態度間の一貫性があることを示す結果が得られた。こうした結果は、顕在的自尊心と自己呈示的価値観が強く関連していること、および、顕在的自尊心と潜在的自尊心の相関が状況によって変化するという新たな知見を提供している。

以上、本論文は日本人の自尊心の潜在的側面を取り上げ、あらたな知見を提供しており、日本人の自尊心研究の進歩に大きな貢献をするものである。よって、本審査委員会は本論文が博士(社会心理学)の学位に値するものと判断する。